

漱石の息遣いを感じるまち

NATSUME SOSEKI

令和8年は夏目漱石の「来熊130周年・没後110年」、令和9年は「生誕160年」の記念の年です。本市が取り組むさまざまな記念事業とともに、熊本に残る漱石ゆかりの地の魅力を紹介します。この機会に、漱石の魅力に触れてみませんか。



出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

!! 漱石が歩んだ人生

慶応3
(1867)年
1月5日(陰暦)

幕末に誕生

父、夏目小兵衛直克、母千枝の五男として誕生。生まれた日が庚申(こうしん)の日で、この日に生まれたものは、悪くすると大泥棒になるとの俗信があり、「金」の字を付けるとそれが逃れられると言われていたため金之助、と名付けられた。

明治29
(1896)年

松山から熊本の地へ

4月 第五高等学校英語教師として赴任→①
5月 「敗屋」と呼ぶ家に転居
下通町103番地に転居→②
6月 キヨ(通称：鏡子)と結婚
9月 合羽町237番地
(坪井2丁目付近)に転居

明治30
(1897)年

「大江村」へ

9月 大江村401番地に転居→③
暮れから翌年正月にかけて、山川信次郎と小天旅行へ

小天温泉への旅が小説の舞台となっている名作『草枕』

明治31
(1898)年

市内を転々と

3月 井川淵町8番地(藤崎八幡宮近く)に転居
7月 内坪井町78番地(現存)に転居→④

明治32
(1899)年

漱石、熊本で父になる

5月 長女筆誕生
8月 五高の同僚・山川信次郎と阿蘇登山

小説『二百十日』は、この阿蘇登山の体験がモデルといわれている

明治33
(1900)年

熊本7回目の転居後、横浜から英国へ

4月 北千反畑町78番地(現存)に転居→⑤
9月 横浜から英国へ出発

参考 熊本近代文学研究会『漱石の熊本研究年表』(2025.2、花書院)

熊本に残るゆかりの地

漱石は明治29年(1896年)4月13日、第五高等学校(現在の熊本大学)の英語教師として池田停車場(現・JR上熊本駅)に降り立ち、4年3カ月の間、この地で過ごしました。その間、7回引っ越しをしましたが、そのうち3軒が現存し、2軒は漱石が住んだ当時の場所に家があります。現地に漱石の旧居が残っているのは熊本だけです。



● 五高記念館 ①

漱石が教壇に立っていた赤レンガの建物で、資料館として一般公開されています。



● 大江旧居 ③

現在の新屋敷1丁目にあったものを水前寺成趣園近くに移築復元しています。



● 内坪井旧居 ④

鏡子夫人が「一番いい家だった」と語っています。長女の筆はこの家で誕生。



● 北千反畑旧居 ⑤

通勤途中に建設中の家を見て気に入り、借りたと伝えられています。

人柄から夏目漱石を知る。好きになる。

新感覚のポップな文学ミュージアム

● 夏目パージアム ②

漱石の人柄や世界観に気軽に触れることができます。漱石と「会話」ができる仕掛けも!

